

合言葉は「きょうなにするん」

「きょうなにするん」が合言葉となった高松市のユニークな独自事業である「芸術士派遣事業」が始まって10年が経過しました。優れた幼児教育として世界的に知られるイタリアのレッジョ・エミリア市のアトリエリスタという職業による芸術教育を模した取り組みを行いたいと、「NPO法人アーキペラゴ」（三井文博代表）から提案があったものを全国で初めての試みとして取り入れたものです。始まったのは、第1回の瀬戸内国際芸術祭が開かれる前の年の秋。さまざまな芸術分野に高い知識を有する「芸術士®」（注）が市内各所の保育園などで子どもたちと行動を共にしながら、その興味や芸術表現をサポートするアートな保育が10年間、続けられてきました。「きょうなにするん」展のパネルや報告冊子の写真に見られる、一寸の邪気も無い子どもたちの笑顔と、好奇心や歓喜に満ちあふれて光輝く瞳を見るだけで、この事業が大きな成果を残し得ることを確信できます。

芸術士と子どもたちの共同作業による創造の現場の様子を聞いていると、「啐啄同時（そったくどうじ）」という禅語が思い出されます。鶏のひなが卵から生まれ出ようとするとき、殻の中から卵の殻をつついて音をたてる「啐（そつ）」と、そのときすかさず親鳥が外から殻をついばんで破る「啄（たく）」が同時ではじめて、卵からひなが生まれます。殻を破ろうとする者と、それを導く者。そんな両者の「啐」と「啄」がピタリと同時に行われるというのが師弟の理想であるとされているのです。親鳥が芸術士、卵の中のひなが子どもたち、と考えると、保育園などで行われる芸術活動を通して「啐啄同時」が何度も実践され、元気の良いひなが生まれ、大きく育ってきたことが窺（うかが）えます。

「きょうなにするん」と、いつも待ち切れない子どもたちの意欲と創造力を引き出しながら続いて来た「芸術士派遣事業」。次の10年の展開とその成果が楽しみです。

（注）「芸術士®」は平成26年にNPO法人アーキペラゴにより商標登録されました。

